

カラタニシヨ通信

スペシャルインタビュー

阿部 晋也さん（丸吉日新堂印刷）

エコもビジネスも人との出会いから
広がっていく

特集

Bhado開発者インタビュー
薬害からの学びが出発点に





広げると通常の4倍のスペースを使える名刺。写真は阿部さんの実際の名刺。

名前や連絡先だけではなく、ビジネス内容をPRできる情報を入れてみたんです。すると、名刺を渡したときの相手の反応がまったく違つて、名刺の持つ可能性に気づきました。今つくっている名刺はデザインもいろいろですが、最近はこんなのももつくりています」

そう言つて阿部さんが差し出したのは、四つ折りで、広げると両面合わせて8面ある名刺。経歴や会社の経営理念が、写真やイラストとともにわかりやすく書き込まれています。

「なぜエコ名刺をつくっているのですか?」と毎回聞かれるので、それなら名刺に書いたらえど笑)。名刺で自分自身をブランドイメージするイメージですね。

は、はじめの出会いが大事です。次に会うかどうかは、初対面でいかに共感が持てたかで決まります。名刺交換の段階で、製品のワオリティや会社の理念などの基本情報が伝われば、ビジネスの話も格段にやりやすくなるでしょう。名刺に顔写真を入れるのも理由があります。人は同じ顔を3回見ると安心感が生まれ、その人をいい人と認識するそうです。名刺に顔写真があるのとないのとでは、ビジネスがまったく違う次元でスタートすることになります」

名刺を環境保護に役立てたい

れているのは、その斬新なアイデアだけではなく、環境を守る活動、貧困国に雇用を生み出す仕組みをつくりたことがあります。工場名刺をつくるきっかけはどういたことだったのでしょうか。

「名刺がいかに大切なツールかを実感していたとき、ちょうどキリストバレッジさんから回収されたペットボトルで名刺がつくれない

「セミカクならもうと環境に貢献できる仕組みをつくりたいと、アウトドア用品メーカーのパタゴニアが窓口になっている『1%フォード・ザ・プラネット』を通じて、名刺売り上げの1%が環境保護団体に寄付される仕組みをつくりました。これが『名刺を買うだけで環境保護に役立つのはうれしい!』とお客様に大好評でした。この「名刺で削減できるCO₂の量は微々たるものですが、『環境意識を変える』という意味で、大

名刺づくりは、印刷所にとつては利益になりにくい仕事でたいていの会社はいやがります。それでうちのような小さな会社に話がまわってきたのでしよう。これはチャンスだと思いました。ペットボトルでシートをつくれている会社を探し、そこと一緒に試作品を重ねて完成したのが、今も使つているペットボトルの再生紙です」

完成したのは、白と半透明の2タイプ。2リットルのペットボトル5本から、およそ100枚の名刺ができるといいます。

「せっかくなら、もっと環境に貢献できる仕組みをつくりたいと、

上はペットボトルの再生紙、下はバナナペーパーでつくった名刺。この他にもオホーツクのホタテ貝や広島の平和の折り鶴を使ったものなどユニークな再生紙が20種類あります。

さな役割を果たします。名刺交換のときに『うちの会社はこういうふうで環境に貢献しているんです』と自ら話せば、環境意識の低い人でも自然と意識が変わつてきます。名刺を渡す人、受け取つた人の両方の意識を変えるきっかけ

好評を得ていたペツトボトルのエコ名刺ですが、石油の高騰により手に入らなくなるという危機もありました。

エコもビジネスも
人との出会いから
広がっていく

スローヴィレッジでも名刺をお願いしている丸吉日新堂は、知る人ぞ知る「エコ名刺」の草分け的な印刷屋さん。人との出会いを大切に、「名刺」を中心にビジネス展開をし現在顧客は6万人。代表の阿部晋也さんに、エコ名刺をつくったいきさつや、仕事への思いをおうかがいました。



「名刺」は人と人をつなげる重要なツール

阿部晋也さんが名刺の大切さを強く意識したのは、お父さまの経営する印刷会社に就職し、飛び込み営業の仕事をこなしていた時期だといいます。

「入社後2年間は毎日100件、営業でまわっていました。断られればかりでしたが、お客様などなかなかよくなるコツもつかんでいきました。それまでも名刺は大切な営業ツールと思っていましたが、お

あべ しんや 丸吉日新堂印刷株式会社
阿部 晋也さん 代表取締役

北海道内の大学を卒業後、東京の接着剤メーカーに営業職で就職するも、人を大切にしない会社の経営姿勢に幻滅し、半年で退職。その後、北海道に戻って父親が代表を務める丸吉日新堂印刷株式会社に入社し2年間営業職を経験したあと、24歳で代表取締役に就任。人とのつながりを大切に、名刺を中心としたビジネスを広く展開している。趣味は子どもの頃から続けているサーフィン、釣り、キャンプ、旅行、登山、ランニングなど。

丸吉日新堂印刷株式会社 <http://www.nissinbou.co.jp>



誰も悲しい思いをしない、みんながともに笑顔になれるビジネスがモットーです

は、人々がみんな「なかよくなることが大切」と言います。「本当のエコは良好な人間関係から生まれると考えています。たとえば煙草のポイ捨てなども、誰も見ていないからとか、知らない土地だからといついやつてしまうこともあるでしょう。でも、知っている人の家の前では「ゴミは捨てないです」。みんな友だちになれば、環境保護もいい方向に向かっていくと思うんです。そうした意味もあり、同じ名刺

を使っているお客様と同士をつなぐ交流会も、全国で開催しています。人と環境を大切にしたいという思いをもつ人ばかりで、自然と話もはずみ、「ワニユーニケーションの輪」が広がり、ビジネスに発展することもあります。昨年は会をきっかけにご結婚された方もいました。今年は台湾で日本人と現地の人とのビジネスマッチングの会を行います」

名刺以外の印刷物の制作も、人をつなげる大切な役割を担うもの行う予定です」

は、人々がみんな「なかよくなることが大切」と言います。「本当のエコは良好な人間関係から生まれると考えています。たとえば煙草のポイ捨てなども、誰も見ていないからとか、知らない土地だからといついやつてしま

うことがあります。でも、知っている人の家の前では「ゴミは捨てないです」。みんな友だちになれば、環境保護もいい方向に向かっていくと思うんです。そうした意味もあり、同じ名刺



「お客さまとも友人のようなおつきあいをさせていただいて、ランニング部をつくったり、登山をしたり。『大人の寺子屋』という講師を招いての勉強会も開催しています」写真はランニング部の仲間と。

棄されるバナナの茎を紙にできれば、世界中の木を一本も切らなくてよくなり、さらにバナナ繊維の加工作業によって雇用も生まれるということでした。『これはすごい!』と思い、講演後に講師の楽屋を訪ねバナナペーパーの仕入れ先について教えてもらいました。そのとき教えてもらつたのはバンガラテシユのもので、早速取

り寄せたところまでを現地で行い、紙に現する紙を自分たちでつくれないものだろうか……と考えていた矢先、大手製紙メーカーの再生紙偽装が明るみになり、私たちの使っていた再生紙の一部も偽装とわかりました。そこで、うそのない紙を自分たちでつくりたい、といふ思いがさらに強くなりました。

ちょうどそのときに制作していった名刺の中に、環境コンサルタントのペオ・エクベリさんの名刺があつて、『この方なら力になってもらえるかもしね』と思いつぐに連絡をすると、2週間後に東京でお会いできることになりました。そうしてペオさんにお会いしてバナナの木を紙にしたいという話をしたら興味を持ってくださいました。ペオさんはバナナの産地であるアフリカのザンビアでも環境保護活動をしていたので、話は早く、その後、実際にペオさんがザンビアを訪ねました。そこでバ

ナ農園を管理している酋長ともお話ををして、ザンビアでの仕事をスタートしたのです。

その後、阿部さんとペオさんは「ワンプラネット・ペーパー協議会」を設立し、同業者がバナナペーパーを広く活用できる仕組みをつくりました。

「環境もよくし、貧困地域で雇用も生むというすばらしい紙を自分たちだけで使うのはもつたないな。今までライバルだった印刷業者とも、これからは同じ目的をもつて、一緒になかよくなりようということになりました。うちには名刺だけですが、他社ではバナナペーパーのシールやカレンダーなど、いろいろな印刷物をつくりてこの紙を広めています」

**阿部さんは、環境保護のために
本当のエコは、良好な人間関係のもとに実現されるもの**



アフリカ・ザンビアの地を訪ねて

「アフリカの人たちは、みなとめしわせそうです」と阿部さん。「楽しんで仕事に取り組みとても勤勉。現地の人に日本人の通勤や働いている様子を見ると『こんなに狭い場所に押し込められてかわいそう。私たちが日本人のためにできることは?』と言い、やさしくて思わず涙が出そうになります。本当のしあわせとは何なのか、人が人を助けることとはどんなことなのか……考えさせられます」(阿部さん)

「名刺をつくる仕事をはいさな仕事ですが、正しい心構えでつくつたものが広がれば、善の循環が生

じてみんながしあわせになる社会が実現できたらいいなと思っています」